

## 「地域における現状と今後の課題」

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 倉知大輝

活動先：あかり

岡本ゼミ

1. はじめに、なぜ地域における現状と今後の課題というタイトルにしたのか。

地域福祉コースでサービ斯拉ーニングという大きな活動を通して地域に住む方々の現状や課題が見えてきた。そこから、地域に住む方々と触れ合い現状・課題を知り以下のように気づいたこと、考察をまとめた。

2. 地域における現状・課題とは何だろうか。

地域福祉コースに所属することは、地域の現状を知り交流をすることが目的だと思う。つまり、サービ斯拉ーニングにて地域の方々と活動を通して少子高齢化、施設からは職員不足の課題などが挙げられたのである。なぜなら、少子高齢化における社会現象で高齢者が年々増加していることは当然のことである。介護、福祉施設で高齢者や障害者の利用者も利用しているが職員不足における問題が一番の課題と見えたのである。たしかに、この介護職員不足として背景に挙げられることは介護、福祉が社会に浸透していないことがあると思う。介護、福祉の職場というのは肉体労働、福利厚生の不十分さなどがあるだろう。この、職員不足の課題を解決する役割という制度が地域包括ケアシステムなのかもしれない。地域包括ケアシステムは、厚生労働省が推進している制度で2025年を目途に高齢者が自立生活を送れるよう包括的にサービス提供することである。地域包括ケアシステムは、夏の活動を終えて研究報告会の発表でも研究したテーマである。

この、厚生労働省が推進している地域包括ケアシステムは、デメリットもあるだろう。デメリットは、自立生活を送ることは自宅での介護生活を送れるように専門的知識、技術も身に付けなければならないことである。今までの介護というのは、病院・施設での入所が当たり前だったが2025年から自宅でのケアが必要になること。

今回のサービ斯拉ーニングから地域には、「資源」というサービスで利用可能な施設を発見した。今回のサービ斯拉ーニングでは、あかり・きらりを訪問し認知症カフェを行った。そこで、音楽療法士がゲストで来られたり、近所に住む高齢者の人々と共に歌を歌ったりした。テーマが認知症とあっただけに住民の人々、職員さん、私たちとお話をしたのである。

ここで、気づいたことは地域における資源は身近にあるということである。地域における資源というのは、市町村ごとに異なるが広報や報道機関などで情報収集を行うと良いと思う。私も住む地域の広報を見ているが、高齢者の認知症講座が多く開催されている。社会福祉協議会、施設職員による講座などがある。たしかに、地域の現状として高齢者の認知症予防などが行われている。そのため、今後の地域包括システムの自立生活を送るため地域資源を有効活用することが効果的だと感じたのである。地域における資源を有効活用すれば、これからの地域包括ケアシステムにおける生活において情報収集、専門的知識が得られるだろう。でも、日本福祉大学という福祉の専門的知識を大学で勉強している私たちも福祉の現状を伝えることが必要だと思う。福祉だけ勉強して将来、病院・施設・企業で

働くだけでなく大学で習った専門的知識を職場で生かすことが求められるだろう。

サービスマーケティングの活動では、地域福祉コースの課題として訪問して活動したが専門的知識も浅かったため利用者さんの特徴やニーズを知ることが困難な所があった。利用者さんの病気による進行状況によっては、自ら、コミュニケーションを取りに行くと利用者さんも笑顔で応対してくれたのである。ここでは、難聴の利用者さんもいたので話しを大切にしてお話したり高齢者の人々が好きな話題を提供した。専門的知識を身に付けるのも必要なことだが、利用者さんのニーズによって支援を行うのも必要だと感じたのである。

したがって、厚生労働省が地域包括ケアシステムを推進しているため今後は、自立生活・地域資源を大切にしなければならない。この地域包括ケアシステムを円滑に進めて行くために生活を見直し地域を知ることが大切だと思う。私は、地域にある身近な資源を有効活用し、これからの生活に役立てていきたいと感じたのである。

### 3. 気づいた点

私が地域福祉コースで活動して気づいたことは NPO 法人が非営利で事業を運営していることに気づいたことである。私自身、NPO というのが施設の代名詞と言っても過言ではないと思っていたのである。つまり、NPO 法人は企業とは異なり利益を追求しない施設。たしかに、利益を求めないのは素晴らしいことだが運営していくこととなると費用も必要となる。そのため、NPO 法人には運営費など様々な資金調達が必要なことに気づいたのである。

### 4. 成長したこと

私が成長したと思うことは地域のことを知り人々と関わろうとする姿勢になったことである。サービスマーケティングや研究報告会からゼミの皆や地域の人々と交流しコミュニケーションを取ることが大切だと感じたのである。最初は、人見知りの特徴がありゼミの皆と打ち解けられるか不安でもあった時期があった。でも、サービスマーケティングで職員、利用者さんとコミュニケーションを取っていくと自信が付いてきたのが分かる。地域のことを知ると、現状や課題を見つけることも可能で、そこから、人々と地域の現状を考えると共に、他の地域での現状や課題を知ると住む地域の見方も変わってくると感じたのである。

### 5. 自分自身がどう変わったか

夏休みにサービスマーケティングで常滑市に行ってきた私が住む地域の現状を知りたいと思った。なぜなら、市町村ごとに現状、課題は異なるが少子高齢化に対応して地元の地域福祉計画がどう機能しているか知りたいと思ったのである。つまり、日本の現状でもある少子高齢化について市町村ごとに対策が行われているか知りたいと感じたのである。広報や市のホームページなどで地域福祉計画を含め、今後について考えている地域は、将来のことも考え行動していると思ったのである。

## SLでの自身の経験となり、新たに見えた課題点

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 高村 涼太

活動先：あかり

岡本ゼミ

### 1. はじめに

私は常滑市にあるデイサービス施設あかりときらりでサービ斯拉ーニングを行った。私自身が高齢者系の施設に行くのが初体験であったために、デイサービスとしての一日の内容や、どういった方が利用をしているのか実際に知る事ができ、大変勉強になった。また、施設先では自分たちで考えた企画も行い、ありがたいことに利用者さんに喜んでもらった。そこで、あかりときらりで、私たちが考えて行った企画にどういった意味や効果があったのか、また利用者に関わって見えた課題についてまとめていきたい。

### 2. 企画を考える意味

サービ斯拉ーニングでの活動で企画を一から考えるということを行った。企画は体を動かすレクリエーションと、思い出を形として残すということをコンセプトとした風鈴作りを考えた。企画内容を考えるところまでは、簡単に進めることができた。しかし、実行するまでのステップアップが非常に苦勞をした。まず風鈴の材料となる貝殻集め、そして集めた貝殻一個一個に穴を開ける作業にとっても時間がかかった。それと同時にレクリエーションに必要なお題であったり、道具も作らなければならなかったので、具体的な計画表を作成しておくスムーズに作業が行えたのではないかと考えた。

企画を準備する作業も終え、サービ斯拉ーニングが始まりいよいよ自分たちが考えた企画を実行した。まずはレクリエーションを行ったが、レクリエーションの内容が私たち若者は難なくできる内容ではあったが、施設先の高齢者の方が行うには身体的面で難しかった。というのも、体を動かして、速さを競うゲームだったために、体を動かすことが困難な高齢者の方は不利なのだ。また、耳が聞こえにくい高齢者もあり、お題を読み上げても聞こえないからわからないと言われた。実際にやってみると反省点ばかりであったが、利用者さん同士で聞こえにくかった部分を共有してこちらに教えてくれたり、速さではなく正確で競い合うといったアイデアを出してくれたり、向こうの方々の助けを借りながらレクリエーションを楽しめる内容にすることができたのだ。風鈴作りも上記で挙げたのと似た理由で、目が見えにくいため、小さい穴に糸を通すことが難しいといった声が挙がった。これに対しては職員さんから意見を貰い、穴を大きく開けて見やすくする、糸通しを使うなどの工夫を行い、企画を成功させることができた。

両方の企画を行い、感じたのは利用者との距離が一気に短くなったことである。企画を通して、利用者さんとのコミュニケーションが取りやすくなったのだ。また、普段は寝たきりの利用者さんが、企画の際には積極的に参加しており、施設の職員さんも驚いていた。以上のことから考察すると、企画を考える意味とは利用者さんを知るためにあるのではないかと考える。最初の事前訪問の際に職員さんが仰っていた、「学生ならではの企画を考えてほしい」という言葉に、最初は若い人のエネルギーを高齢者の方に伝えてほしいのではないかと解釈をしていた。もちろん、その言葉にはそういった意味もあったかもしれない。しかし、今振り返るとその言葉には企画を通して利用者さんの顔を間近で見てくれという意味が大きかったのではないかと考えた。間近で見て、関わることで、初めて利用者さんを知ることができるから企画を考えてほしいと言ってきたのではないだろうか。間近で関わることで企画が成功して、利用者さんに喜んでもらったのではないだろうか。サービ斯拉ーニングで関わるという意味を多角的に捉えることができたと思う。



### 3. 関わりで見えた課題

利用者さんと関わり、見えた課題が、家にいても自分一人しかいないという人が多いことだ。その背景には、息子さんや娘さんは仕事の都合で地方にいるために会うことが困難であったり、パートナーが先に死去してしまったためなどがあった。けれども、あかりやきらりに来ることで、みんなとお喋りができて楽しいという声があった。そういった声が挙がるということは、あかりときらりが利用者さんのニーズに応え続けた姿があったからであろう。また、あかりときらりでは利用者だけではなく、地域の人達の居場所作りにも積極的な働きかけをしていた。地域カフェや認知症カフェを開いたり、ヨガ教室や学習支援教室を開き、子どもから高齢者の方を対象とした居場所作りをしているのだ。こうした働きかけにより、地域で孤立している人を減らし、人々の繋がりができるのだ。NPOの支援として、ミクロ的視点をベースとしながら、マクロ的支援を行っている。ベースとなる部分がミクロであるために、みんながいて楽しいという環境作りができていないか考えた。しかし、この支援は職員さん達もどのように進めたらいいのか方法を確立しているわけではなく、手探りでやりながら続けている状態である。そのためにも、こういったNPOを支援する人達の存在が今後重要になるのではないだろうか。例えば、上記で挙げた認知症カフェは音楽療法士の先生を招いて、認知症予防を行っていた。NPOの職員だけで開くのは普段の日常業務もあるために限界がある。そのためにも専門職の力であったり、助けとなるボランティアなどの支援があることで、このような働きが生まれて、より良い居場所支援が出来上がるのではないかと考えた。

## NPO の役割

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 塚本理沙

活動先：あかり

岡本ゼミ

NPO 団体はそもそも、どのような団体でどのような活動をしているのかサービスラーニングの活動をする前の私は知らなかった。非営利であることにどのようなメリットがあるのか、なぜ公的サービスだけでなく地域性を踏まえて活動しているのかその意味さえ理解できていなかった。

私が被災地支援活動をしていることを知り、活動先の職員さんがこのような話をしてくれた。「ロープよりも紐の方が強くなる時もあるんだよ。ロープはね、言うならば公的制度やサービスのこと。ロープの方が紐よりも強いのは当たり前だけど、ロープでは助けられない人もいるんだよ。細くて、本当にちぎれそうな紐が私たちの活動、NPO。ほら、紐は柔軟性があるでしょ。そんな細いちぎれそうな紐でも必要としている人はいて、紐でないと助けられない人もいるんだよ。だから、私たちは切れそうな状態でも、切れないように活動を続けていくことを大切にしているんだよ。だからね、続けることは大事。世間が忘れてしまっても、世間の人が見えていなくても続けることが大事なんだよ。」続けることの意味や、地域の中で見え隠れする日々の生活の中に困難がある人の存在について改めて考えた。私は、これまでに東北3県、熊本県に行き現地支援活動をしてきた。毎度毎度、見えにくい存在や事実に気づき考えさせられている。サービスラーニングでも「見えない声、見えにくい声を聴こう。知らない世界を知ろう。」と、思い活動をしてきた。これが、「ロープよりも強い紐」なのではないだろうかと思う。

私は、後期のグループ研究でテーマを『NPO の役割・居場所づくり』にした。NPO の活動の役割は大きく分けて4つあることがわかった。『自己実現や社会貢献の場の提供主体』、『新たな公共サービスの供給主体』、『自己責任型社会を実現するための原動力』、『新たな地域社会づくりと分権社会を促進する主体』の4つである。実際にサービスラーニングの活動中にこの4点と重なる場面に関わることもあった。『自己実現や社会貢献の場の提供』は街角サロンきらりの運営状況と重なっているように思う。職員さんから、「きらりはあかりにいる職員さんの中にケーキ作りが得意な人がいて、それを活かして喫茶経営をしてくれているんだよ。」という話や「この施設の周辺に住んでいる人たちが撮った写真や利用者さんの作品で季節ごとにきらりの内装を変えているんだ。」という話を聞いた。まさに、地域に根差し、地域の中の人の力を活かすとはこのことだと感じた。「自分が将来、年をとった時にこんなところがあったら…と思える場をつくる活動を。」という思いから始まったのが特定非営利活動法人あかりである。あかりでは公的制度から制度外のサービスも提供している。設立経緯や活動内容と『新たな公共サービスの供給主体』『自己責任型社会を実現するための原動力』という部分がリンクしている。きらりの地域カフェは利用者も地域の方も利用できる場となっている。常滑の特産物である常滑焼教室も夏休みに子どもたちを集めて開催している。これは『新たな地域社会づくりと分権型社会を促進する主体』と重なる。私たちが活動先で行った貝殻を使った風鈴づくりも今あるもの(活動先の地域資源)から、今いる人(利用者)1人1人に合わせて作成するというポイントでは一致している。最終的に私の中でNPOの役

割は地域に密着し、その地域の良さ「そこで生活している人、特産物、観光地…」や弱点「制度から漏れてしまうような人、声を挙げたくても助けを求められない人の存在、地域課題」を知り、地域にいる人たちで「地域の良さ＝地域力」を活かして1つずつ解決していくことだと考えた。それを経て居場所というものができるのではないかという結論に至った。

NPOは地域に必要な存在で、地域に隠れたニーズを満たすために活動をしているということにもサービ斯拉ーニングを経て気が付いた。しかし、世間はサービ斯拉ーニング前の私のようにそもそもNPOがどのような団体で何をしているかもわからないような人が大半を占めているのが現状である。そのため、多くのNPOは経営も厳しいという。また、運営者の高齢化も進んでおり活動そのものへの参加率も若者は低い。様々な問題がある中で、この若者の参加率の低さについても後期の研究で考えた。若者の参加の防げとなる要因1位は活動に参加する時間がないことであった。仕事はしていなくても、大学の講義やサークル、バイト等々学生も仕事がないからいつも暇をしている訳ではない。そもそもの時間がないから、接する機会もなく、情報に触れる機会もないのである。そのようなことから、参加の仕方がわからずに参加したいと思っても参加の仕方がわからない若者も多いのである。お互いに求めあう関係であるにも関わらず関係を作れずにいる。私が経験したサービ斯拉ーニングのように機会が大切なのだと思う。小中学校の授業でNPOについてはほんの少ししか触れない。コラムに載っている程度である。それから、高校を経て大学生になっても接する機会がなければNPOについての認識レベルもそのままである。若者の参加率を高めるためには若者の意識レベルはもちろん高めなければならない。地域で生活する1人の人として自分の生活している地域の現状や将来について考える必要がある。それと同時に、NPOもサービ斯拉ーニングの様な機会を積極的に活用して若者を含め幅広い年齢層の人と交流する機会がNPOの認知度向上のためにも大切だと感じる。

## 「老い」への気付きと支援の在り方

社会福祉学部 社会福祉学部 2年 藤井保南

活動先：あかり

岡本ゼミ

### 1. はじめに

私は8月のサービ斯拉ーニングで、常滑市の特定非営利活動法人あかりで活動させていただくことになった。あかり、きらりは高齢の方を中心にデイサービス、半日デイサービスなどの支援を行なっている。

私が将来的に就きたい仕事として志しているのは児童福祉分野だったが、二年生のうちから視野を絞り、狭めきってしまったのは学べるものが少なくなるだろうと考え、今回のサービ斯拉ーニングで高齢者分野の学習をすることを決めたのだ。

### 2. サービ斯拉ーニングから学んだこと

サービ斯拉ーニングの内容だが、きらり、あかりで3日ずつ現場で体験を行わせてもらうこととなった。

きらりは地域住民が集まって話すことができるサロンの役割を果たすとともに、半日デイサービスや地域住民が通っている教室などを主に展開している。あかりは午前中から夕方までのデイサービス、その他にも高齢者や障害者に対する訪問での支援、またボランティアなども行なっている。両施設(と表記する)で手伝いや自分たちが考案したレクリエーションなどを行い、常に利用者と一緒に作業したり、話をしたりしながらサービ斯拉ーニング期間を過ごした。

あかり、きらりで共通しているのは、利用している高齢者の平均年齢が80代後半と高いものであったことだ。もちろん多少差はあるが、中には90代後半の方も利用されていた。どの方もサービ斯拉ーニングに来た私達学生にとっても優しくして下さったが、活動中に一つ不思議に思うことが出てきた。

同じ年代、ほぼ同じような年齢の人でも「老い」の進行度というべきか、個人で「老い方」が全く異なっているように感じるのである。もちろん、個人としてそれぞれの個性があり、特徴も違うのは当然のことなのだが、「老い」をその人の個性の中の一括りにしてしまっても良いのかという疑問も浮かび上がってきた。

同じ年齢でも一方の人はとてもはきはきと言葉を話すし、自分で立ち上がって歩くこともできる。もう一方の人は言葉がうまく出てこないこともあるし、自力で立ち上がることは難しく、他の人や歩行器による補助がなければ歩き回することは難しい。そういった違いが顕著に表れているのである。

当然、老い方が違うのだからより老いている方が悪いというのではない。あかり、きらりの職員の方はその違いを受け入れた上で、ごく自然に利用者ができる限り平等になるよう支援をしていた。老いが進行していない人に制限を設けるのではなく、老いが進行している人にも同じことができるよう毎回工夫するのである。衝撃を受けた思いだった、自分が今まで見ていた支援の在り方がいかに表面的であったかを、職員方の支援を見ていて知ることとなった。

私はこのサービ斯拉ーニングを経験するまでは、デイサービスに来られる高齢者であるなら、特にその方の個性や身体的特徴以外で差はないのではないかと考えていた。しかし、今回それが間違っ

おり、高齢者分野にとって切っても切り離せない「老い方」をそれぞれ見極めて、接していく必要があったのだということに気付いた。そして、その「老い方」をそれぞれ理解した上で受け入れ、付き合っていくことができる場所が地域に存在するということが、肉体だけでなく、精神的にもとても重要な役割を果たしているだろうことも理解することができた。

### 3. まとめ

私の両親は高齢者分野の直接援助、相談援助の仕事をそれぞれしているのだが、私自身は取り立てて高齢者分野に興味があったわけではない。それどころか、両親の話を知っていると、利用者を見送らなければならない機会が多い分野であるということがわかってきて、どちらかという敬遠しがちな分野であった。

しかし、今回サービスラーニングの現場で実際に利用者に関わりを持つことができ、その方々が思い出を語る生き活きとした姿、ささいな行動や会話から生まれる笑顔を知ることになり、高齢者分野には常に死が付きまとっていると考えていた私であったが、同時にここにこそ生き活きとした生命があるのだと感じた。そして、あかりやからりのような施設が利用者を孤独にすることなく、周囲の人間や地域とのつながりを持たせることで、その生命にいつその輝きを与えているのではないかと考えるようになった。

私の一番やりたいことは児童福祉であることは現在も変わらない。児童福祉分野に関わっていくことはもはや自分の義務であるようにも感じており、その考え方が揺らぐことはやはりないだろう。しかし、今回の経験を糧に、ただ支援することを目当てにするのではなく、どうすればより多くの子ども達が輝きのある人生を歩めるようになるか、支援が表面的なものにならないか、常に考慮した支援の在り方を探っていくべきであると考えている。

〈参考 URL〉

<http://www.akari-npo.jp> 特定非営利活動法人あかり 2017年1月4日